

宝物をみつけよう

1. 天蚕の繭の絹糸 (地図中①地点)

落葉が始まり、樹間が透けて見えるようになると、ヤママユの繭(まゆ)が目につくようになります。成虫はすでに羽化した後であり、繭の上部は溶かされて脱出口となっています。風の強い日の後は、運が良ければ地上に落下したものを目にできます。

カイコの仲間で、幼虫が大型であるためその絹糸は太く丈夫で、この糸で作った織物は数代にわたる使用に耐えるといいま



ヤママユの幼虫

す。カイコの絹糸の10倍の値がつくそうで、信州などで飼育

されています。鳥取県でもかつて産業として取り入れられましたが、家畜化されていないため労力を多く要し、年一化性ということもあって経営が成り立ちませんでした。倉吉市周辺でも飼育用のクヌギ林が放置され、大きくなっています。

春、木々の芽出しとともに孵化(ふか)した幼虫は、6月に薄黄緑色の繭を作ります。幼虫は葉柄(ようへい)・葉脈を持つ新緑の

葉に化け、繭も緑の中で見事に保護色となっています。

地上に落とす長径1cmもある俵型の大きな糞があった場所を覚えておくと、繭を探すよい目印となります。

2. アンモナイトモドキ (地図中②地点)

化石として有名なアンモナイトのそっくりさんが、打吹山に産します。林縁のつる植物、アオツヅラフジの種子を取り出し、ルーペで見てください。秋に黒く熟した液果をとり、中の種子を洗うと形のよいアンモナイトが

出てきます。自然界は一定の形態形成のしくみを持ち、それは動植物に共通するものであることを示しています。同じシステム

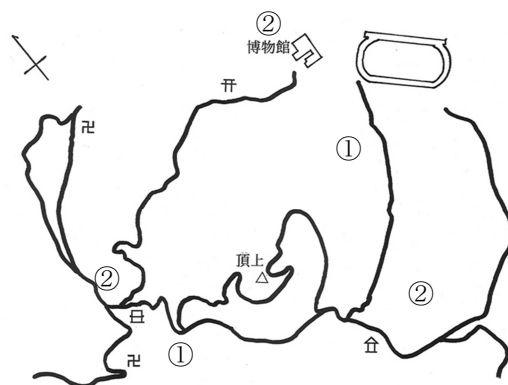


アオツヅラフジの果実

を使いながら、ある部分が働かないことで異なって表現されてしまうのです。

アオツヅラフジは雌雄異株で、黒紫色の実をつける雌株は遠くからでも目立ちま

す。全体が有毒で、果実も口にはいけません。つるは蔓細工に用いられ、長期の使用に耐えます。柔軟性と強度を合わせ持ちしかもまっすぐ伸びていて使いやすいのは、地表を這っているつるです。空中に伸びているつるは脆く、同じ植物体でも部分によって性質が異なります。フジのつるでも同じことがいえます。



アオツヅラフジの種子